

パブリック・ソシオロジーをめぐる国際論争

The International Discussions on Public Sociology

京谷 栄 二*

Eiji KYOTANI

はじめに

マイケル・ブラウォイは2004年のサンフランシスコで開かれたアメリカ社会学会大会の会長講演において、社会学がアカデミズムの世界を超えてパブリックに接近し、パブリックと双方向的な関係のなかで研究を進める新たな方向を提示した (Burawoy 2005a)。ブラウォイのこの提唱はアメリカ合衆国のみならず、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、南アメリカ、世界の各地域の社会学界に大きな波紋を広げ、パブリック社会学を特集した多くの学術誌と学術書が今日もなお出版されている。本稿では、ブラウォイが提唱するパブリック社会学とは何か、その骨子を整理した上で、パブリック社会学をめぐる国際的な論争を主要な論点に絞って検討する¹⁾。

1 パブリック社会学とは何か：社会学の革新のために

ブラウォイによれば、社会学は「社会的公正、経済的平等、人間の権利、持続可能な環境、政治的自由」を求め、「より良い社会を求める本源的な情熱」をもつ。19世紀から20世紀にかけて活躍した社会学の創始者であるマルクス、ウェーバー、デュルケムらの研究を貫いていたのはこの「社会学的精神」であった。しかし20世紀における社会学は、学術界における市民権を築くために「純粋科学」として発展する道をたどり、社会学

の対象である現実の社会から離れて学術界——象牙の塔——のなかに自閉し、専門主義 professionalism を強化する傾向が支配的となった。その結果、社会学がもつ「本来の道徳的原動力」は衰退した (Burawoy 2005a: 4-6)。他方このような傾向を批判した1970年代のラディカル社会学も「社会の変革ではなく社会学の変革」を目的として学術界に向けて発信されたものである限り、その限界は同様であった (Burawoy 2005c: 313)。

この問題認識を踏まえてブラウォイは、現実の社会から疎遠になった社会学がその距離を取り戻すために、その社会を構成する人々＝パブリックに関与する社会学への方向転換を提唱する。より具体的には、後述するように「第三の市場化の波」を基礎に置くパブリック社会学の分析枠組からすれば、パブリックのなかでも「サブアルタナ (従属的社会集団—A. グラムシ) が主要な対象となる。

そしてこの認識を背景に、ブラウォイは「誰のための社会学か」および「何のための社会学か」を基準に社会学を区分する。前者の軸からは、学者集団のため／学者以外の集団のためという区分、後者の軸からは手段的知識と反省的知識という区分がなされる。その結果、社会学は四つの類型 (理念型) に区分される。第一に、社会学の分析枠組み、専門概念、方法論などを手段としてアカデミズムの世界への発信を目的として遂行されるプロフェッショナル社会学、第二に、それらを

*環境ツーリズム学部教授

駆使して、企業や国家などの学者以外の組織の顧客のために成果を産出するポリシー社会学、第三に、前二者の依拠する前提としての価値やイデオロギーを吟味し批判するクリティカル社会学、最後に、アカデミズム内部での批判に終始する前者と異なり、現実の社会におけるパブリックの状態に接近し、パブリックと関係しながらパブリックのために成果を産出するパブリック社会学である²⁾。

表 社会学的分業の4類型

誰のための社会学か

| | 学者集団のため | 学者以外の集団のため |
|-----------|--------------------|------------|
| 何のための社会学か | テクニカルな手段的知識 | ポリシー社会学 |
| | プロフェッショナル社会学 | |
| | 社会の目的と価値を問い直す反省的知識 | パブリック社会学 |
| | クリティカル社会学 | |

Michael Burawoy. "For Public Sociology." *American Sociological Review*, 2005, Vol. 70, P. 11. Table 1 を加工して作成

パブリック社会学は、市場原理主義と国家専制が席捲する、労働、貨幣に加えて自然環境が商品化される「第三の市場化の波」³⁾のなかで苦難を強いられるパブリック、ブラウォイが多用する用語では「サバルタン」を対象とする⁴⁾。社会学者はサバルタンの状況に関心をもち、彼らに接近して彼らの状況とそれを生み出し規定する社会的脈絡と構造を——ローカルな状況をナショナルからグローバルな次元と脈絡に拡張して——分析する。この過程における社会学者と研究対象たるサバルタンとの関係は、社会学者が単に研究調査を行い分析結果を出すという一方向的なものではなく、分析結果は絶えず対象に返還され、社会学者は対象の反応を受け取り、その反応にもとづいて自らの研究を反省するという、双方向的・対話的なコミュニケーションによるものである。このコミュニケーションをとおして社会学者は自らの研究の前提となる仮説や分析枠組み、分析方法そして分析結果を反省して修正する。このようにパブリック社会学には対象との間の双方向的関係と自らに対する反省とが装備されているからこそ研究が進

化する。これと関連して、ブラウォイは研究が前提としなかった、もしくは予想しなかった事実——変異 anomaly——に遭遇したとき、その事実を排除せずに研究の反省のなかに組み入れることが研究の進化の重要な契機であることを指摘する (Burawoy 2009a: 21)⁵⁾。

このようなブラウォイ自身のパブリック社会学を支える方法論は、彼が40年余にわたるエスノグラフィ——ザンビア、シカゴ、ハンガリー、ロシアへと遍歴した——を反省し総括することを通して構築した「拡張事例研究法 the Extended Case Method」である。ブラウォイは拡張事例研究法を次のように規定する。「四つの拡張：研究している参加者の生活のなかへの観察者の拡張、観察の時間と空間を超えた拡張、ミクロな過程からマクロな過程への拡張、最後にもっとも重要なこととして、理論の拡張である。そしてそれぞれの拡張は次の対話を含む：参加者と観察者の間の、フィールドで継起する出来事の間、ミクロとマクロの間の、そして絶えず再構築される理論の間の対話である。」 (Burawoy 2009a: xv)⁶⁾

以上、ブラウォイは専門主義への特化を志向する主流の社会学、プロフェッショナル社会学に対する批判と反省を踏まえて、パブリックに近接しパブリックとの対話的な関係をとおして研究を遂行し進化させるパブリック社会学を提唱する。したがってパブリック社会学の要求は今日における社会学の方向性とディシプリンの革新であるといえる⁷⁾⁸⁾。

2 社会学的分業・4類型をめぐる

まずパブリック社会学の主張を支える上記の社会学の4類型図式に対して次のような批判が寄せられる。

エリクソンは、4つの社会学は別々のものではなく、それらはすべての社会学に植え込まれていると考え、この図式自体を否定する。社会学の専門的知識、概念、方法を使用しない社会学は存在しないし、「批判的であることは専門主義の中核的要素」であり、すべての社会学は批判的である。またポリシー社会学のみが有用であり、他の社会学は有用性に欠けるとはいえない (Ericson 2005: 365-367)⁹⁾。

土場もエリクソンの指摘を参照しつつ、「価値コミットメントの有無ないしそれについての自覚の有無で社会学の研究営為を分類するブラウォイの図式は的外れ」であると批判する（土場 2008: 59）。

他方では、この図式にこめられた4社会学の相補的關係というブラウォイの構想——それぞれが排他的ではなく相補的に作用することによって社会学のディシプリンが構成され研究が遂行される——に対して、パブリック社会学のプロフェッショナル社会学にたいする批判的立場を強調する論者が疑問を呈する（Derber 2004, Tabrizi 2005, Fishman & Scott 2005）。例えば、社会的正義の観点から、社会学は社会的不正義に直面し抑圧される人々を対象とすべきであると主張するフェギンは次のように指摘する。プロフェッショナル社会学とポリシー社会学から成る主流の社会学はこのような対象に無関心であるばかりか偏見をもつ。したがってブラウォイの4分類の相互補完的なモデルは楽観的であり、主流の社会学がクリティカル社会学とパブリック社会学との連携によって変化する見通しはなく、前者と後者の関係は対立的である（Feagin 2009）。

これらの批判はさらに熟考されねばならないが、この相補的な4類型図式には、それぞれの社会学が他の社会学の成果と知見を活用するという実際問題はさておき、パブリックに近接する研究の遂行という今日の世界が社会学に求める課題に、より多くの社会学者が志向してほしいというブラウォイの期待も混入していると、私は考える。

3 経済学・政治学・社会学の三層構造をめぐる

次に社会学と他の社会科学との関係に対するブラウォイの見解への批判を検討する。

ブラウォイは社会を市場と国家と市民社会の三層に区分し、それぞれを対象とする学問として経済学、政治学、社会学を規定した上で、市民社会は国家と市場により植民地化され抑圧されると同時にその抑圧に対する抵抗が生ずる場として設定する（Burawoy 2005a: 24）。

国家および市場と市民社会を敵対的に考えるブ

ラウォイの構図に対してホールは、市民社会にとって国家と市場は必要であると主張する。世界の多くの地域で適正な国家 *decent states* は必要であり、また市場を廃止しようとした東欧社会主義諸国の経験は市場と民主主義の間に関係があることを教えている（Hall 2005: 380）。瀧川はホールの議論を受けて、「ブラウォイのように『市民社会』の観点に社会学を限定しようとするにしてもやはり国家や市場といった他の諸制度も視野に入れたより包括的な視座は不可欠だ」と指摘する（瀧川2007: 26）。同様の批判はブレイスウェイトとブラディにも見られる（Braithwaite 2005, Brady 2004）。ブレイスウェイトは、「KKKとアル・カイダもまた市民社会の一部である」と指摘し、ブラウォイとは逆に、市民社会の専制を阻止するために強力な国家と市場が必要な場合もありうると述べる（Braithwaite 2005: 348）。

さらに以下の論者は、パブリックに近接しパブリックの状況を改善するというパブリック社会学の課題を遂行するためには、社会学者は社会学内部にとどまらず他の学問へ広がる学際的な方向性をとる必要があると主張する。アロノウィッツは、ブラウォイはアメリカの社会学が社会活動 *social activism* と「実証研究を理論へと向ける義務」の双方から退却していることを見落としていてと批判し、この欠陥を克服するために彼自身は哲学や他の学問の理論も学び、社会学に引きこもらない「社会理論」を志向する（Aronowitz 2005: 336-337）。タブリッチは、「社会学者はパブリックに活動する時、彼らのディシプリンへの忠誠を超える必要」があり、「パブリックな知識人のより大きなコミュニティに所属する」ように助言する（Tabrizi 2005: 369）。またエッツィオーニは、パブリック社会学者は花の栽培家や医者のようにジェネラリストでなければならず、したがって他の社会科学の知識を活用しなければならないと述べる（Etzioni 2005: 376-7）。

市民社会を市場と国家による抑圧から解放する学としての社会学の価値を浮き彫りにしようとするブラウォイの意図は理解するが、しかしこの三層構造については私も疑問がある。今日の市場原理主義の行きすぎに対する批判や反省は、例えば格差社会の問題を取り上げても、社会学者のみな

らず経済学者や政治学者の研究の焦点になっているし、他方ではその問題を分析する時われわれは他の学問の成果から学ばなければならない。ブラウォイが指摘するような市民社会の抑圧状況を課題に据え、その解消をめざす方向を構想する時、これを担う役割をパブリック社会学にのみ特化するのではなく、隣接する他の学問との連携をめざすのが妥当である。またブラウォイ自身の方法論である「拡張事例研究法」は市場や国家の領域にも分析が拡張されるのであるから、社会学を他の社会諸科学と断絶させるかのような三層構造の主張は彼自身の方法論との間にも齟齬をきたすように思える。

4 規範的立場の検討：パブリック社会学は党派的イデオロギーなのか

ブラウォイのパブリック社会学は、市場原理主義のグローバルな展開により災禍を被るサバルタンとしてのパブリックを主要な対象とする。したがってその学問は出発点において一つの立場、言い換えれば価値規範を選択する。パブリック社会学のこの規範的立場をめぐる賛否両論が交わされる。まず支持的な見解からみよう。

エツィオーニはパブリック社会学は不可避免的に規範的立場に立つと主張し、また自らトニー・ブレアの選挙キャンペーンに関わった経験からパブリック社会学は政治に関わらざるを得ないと述べる (Etzioni 2005)。

スミスは尊厳を奪われ屈辱を体験する人々を解放するというブラウォイの立場に共感し、屈辱 humiliation をより広い文脈に広げる。彼によれば屈辱への反応は四つの様式に分かれる。受動的な従属、抑圧者の期待への積極的な同一化、内面の自己と外面の自己の分離、最後に、屈辱を武器に攻勢に転ずる反転 reversal である (Smith 2008: 376-8)。

ヴィヴィオルカは、「社会学的介入」を主張するトゥレーヌとともに研究を進めた観点から、社会学者はパブリックの生活に参加すべきであると考へ、パブリックと社会学者の関係を三つのモデルに分ける。第一にパブリックを従わせようとする「エリート主義」モデル、第二に研究対象とした人々に成果を還元する「返還 restitution」モデ

ル、第三に成果を対象となる人々に限らず広く開放し討論する「審議の民主主義 deliberative democracy」モデルである (Wieviorka 2008: 385-6)¹⁰⁾。

次にパブリック社会学の規範的立場を批判する見解を検討する。

マルチネリは、ブラウォイは市場と国家を敵視し市民社会を理想化する物神崇拜に陥り、民衆と集合行動を理想化するポピュリズムを志向していると批判した上で、社会的弱者の立場に立つことは道徳的に称賛されても、社会科学としての質を保証できないと論ずる。そしてこの学問と政治の関係において重要なのは、両者を峻別したウェーバーの教えであると指摘する (Martinelli 2008: 365-369)。

ニールセンは、ブラウォイのパブリック社会学は、あたかも多数の社会学者がその規範的価値と方法論を共有しているかのような「空虚なわれわれ」を前提としており、その根本的特徴は「それが道徳的・政治的な事柄によって駆り立てられているという点にある。」 (Nielsen 2005: 1621-2) そしてその道徳的・政治的立場とはマルクス主義のそれであり、ニールセンはパブリック社会学はソヴィエト崩壊後のマルクス主義者の隠れ蓑ではないかと疑う。このような性格のゆえにプロフェッショナル社会学の立場からはパブリック社会学は受け入れがたいと結論する。「道徳的・政治的価値にもとづく主張を展開し、価値観の合意形成を過大に評価し、そしてマルクス主義の政治的問題との関連が未だに明らかにされていないがゆえに、パブリック社会学は科学的・学問的な客観性の基準を志向する専門家の間では容易に受け入れ難い。」 (同上: 1626)

ティトゥルは科学的なプロフェッショナル社会学を擁護する立場からブラウォイを批判する。パブリック社会学の主張は何が「社会的に正しい」かは明白であるかのように前提するが、しかしそれは常に曖昧である。社会学にとって重要なのは「科学の基準 canons」であり、その基準とは価値自由でなく科学の価値に立脚していること、実証研究による検証可能なこと、批判に答えることなどである。この観点に立ちティトゥルは「良いプロフェッショナル社会学はパブリック社会学と

相補的であるべきだというのではなく、私はパブリック社会学は良いプロフェッショナル社会学に従うべきであると考え」と結論する (Tittle 2004: 1642)。

日本では土場が、アボットの主張する「ヒューマニスト社会学」(Abbott 2007)と比較して、ブラウォイのパブリック社会学は「リベラルな価値」を市民との対話の前に想定する「認知的」な構成であり、したがってその実践は「実質的には市民に対する啓蒙活動と等しいものとなる」と論ずる(土場 2008: 61)。

さらに盛山は、ブラウォイのパブリック社会学は党派的な主張であり社会学の学問性を脅かすものと批判する。「単に公衆に向けて発信したり、社会的問題や争点についての規範的な主張を行うだけでは、党派的で政治的な活動が優先して学問性が危うくなる」。(盛山 2006: 93)¹¹⁾

この規範的立場に対する批判について私は以下の2点を指摘したい。

第一に、パブリック社会学は社会学の理論的営為と無関係ではない。確かにブラウォイはパブリック社会学の理論と方法論として単一の枠組みを示していない。その理由は、彼はパブリックに近接し、パブリックとの双方向的な関係にもとづいて研究を進めるという共通の方向性を前提として、パブリック社会学の理論と方法論は多様なものでありうると考えているからである¹²⁾。そしてこの多様性のなかでのブラウォイ独自の方法論は、既述のとおり、彼が40年余にわたりつづけてきたエスノグラフィー研究とその反省をとおして再構築した「拡張事例研究法」である (Burawoy 2009a)。

第二に、市場原理主義の席捲が生む災禍に悩まされるサバルタンに共感するパブリック社会学の規範的立場をマルクス主義のみに還元する批判は妥当ではない。ブラウォイが例示する、「市民的自由の侵害、人権の侵犯、環境汚染、労働者階級の貧困化、疾病の蔓延、より多くの人々からの生存手段の剥奪、そして不平等の拡大」などの災禍に「人間性の関心」をもって異議を唱える姿勢は何もマルクス主義に限定されたものではない (Burawoy 2004a: 125)。フェギンは社会的正義の観点から、人種、エスニシティ、ジェンダー、

階級の文脈において社会的不正義に直面する抑圧された人々を対象とする社会学、彼の用語では「批判的パブリック社会学」の再興を主張し、このような立場に疎遠なプロフェッショナル社会学をブラウォイ以上に痛烈に批判する (Feagin and others 2009)。

国内においても国際的にも経済条件や生活条件の格差が拡大する今日、この状況に問題意識をもち批判的な研究を行う研究者は、社会学者のみならず、経済学者や政治学者にも多数存在する。学問的営為からみても、その基本的認識を共有する広さからみても、ブラウォイのパブリック社会学の提唱を、学問的性格を欠いた党派的主張、とくにマルクス主義イデオロギーの表明であると断ずる批判は適切ではない。

しかし同時に批判者の多くが指摘する、パブリック社会学がM. ウェーバーの学問論、すなわち学問と政治の峻別および「価値自由 Wert Freiheit」——これはけっして英語圏で出版される社会学書に散見される「価値中立 value neutrality」ではない——をどのように理解するのかという問題は、未だブラウォイが明瞭に答えていない課題である。

ここで価値自由の問題に限って私見を述べれば、まず価値自由とは学問が価値観から無縁であったり中立であることを意味するのではない。学問は不可避的に一定の価値観に立脚する。例えば医学は生命の保持に価値があるという前提に立って医療を発展させる。したがってパブリック社会学がサバルタンの立場をとること、一定の価値選択を行うことは価値自由の原則に照らしても認められる。だがしかしここで重要なのは、社会学者は自らが立脚する価値観を明確に自覚した上で、社会学者として遂行する考察、分析、結論導出などの事実認識過程がその価値観によって左右されることがあってはならないという規準である¹³⁾。ブラウォイが40年余にわたるエスノグラフィー研究の反省をとおして拡張事例研究法を再構築する学問的営為はこの規準に照応する。また彼は、パブリックとの双方向的関係を重視する他方では、「われわれは専門家として絶えずパブリックに対峙する視野を失ってはいけない」と述べ、社会学者がパブリックの「虜」になって知的な自

律性を失う危険に警鐘を鳴らす (Burawoy 2005c: 323, 2005d: 389)。

5 先進諸国以外の社会学界における反響

以上は主要には北アメリカと西ヨーロッパの先進諸国におけるパブリック社会学をめぐる議論であるが、それではそれ以外の地域でブラウォイのパブリック社会学はどのように受け取られているのだろうか。南アフリカ、ブラジル、中国、インド、ロシアの事例について紹介しよう。

・南アフリカ

ブラウォイはパブリック社会学の例として、アパルトヘイト廃止運動に関与した南アフリカの社会学者の体験をとりあげる。その一人であるハビブは自国の事例を踏まえて、社会学がパブリックに関与するとき陥りやすい危険を指摘する。南アフリカでは多くのパブリック社会学者がアパルトヘイト廃止運動を進める側を正当化する研究を行った。このことが社会学研究の科学の質を損ねただけではなく、1994年のアパルトヘイト廃止後も新政権に対する批判的距離を保つことを困難にするという弊害を生んだ。また社会学者が欧米の経験をそれと異なる南アフリカの文脈のなかに直接もちこんだことが、新政権における新自由主義台頭の一因になった。ハビブはこのような警告を行った上で、しかし最後に、その知識と方法論を用いて今日の時代にふさわしい政治戦略においてサバルタンに関与することがパブリック社会学が直面する課題であると結論する。(Habib 2008: 396)

・ブラジル

ブラジルの社会学者は1964年から1985年の軍党政権下で大学から追放され民間の研究機関などで生き延び、民主化運動に関わった。この歴史からブラジル社会学は、批判的で戦闘的で政治に結びつく傾向が強い——したがってブラウォイの社会学の分業図式のように四つの社会学が個別に存在している訳ではない (Braga and others 2008)。

ブラジル出身でアメリカの大学と大学院で教育を受けたベイオッチは、アメリカの大学においては「政治的中立」が求められるのでパブリック社会学を展開するのは困難であると指摘する。ブラジルでは独裁政権の弾圧によりパブリック社会学

は大学の外で展開された歴史があり、現在でも大学で社会学の教育訓練を受けた多くの人々が大学外の多様な分野で活動している。彼らは大学院教育を受けていないが、社会学会と社会学連盟に所属し、「科学的方法を用いた事実の説明」、「国民主権の実行のために戦う」、「権威主義と抑圧」に反対し「人間の権利の一般生命の原則を守る」という目的のために活動している。ベイオッチはこのブラジルの体験を参考に、アメリカにおいても大学外の組織とつながることによりパブリック社会学を展開するという戦略を提案する (Baiocchi 2005)。

・中国

清華大学のユアンは、社会学者がアカデミズムを超えてパブリックと対話し、「普通の人々の日々の生活」に関与する「社会学的介入」を実践すべきであるという立場から、ブラウォイのパブリック社会学に賛同する。ユアン自身は、地方から出稼ぎに来て家内工業で働き、無権利状態のなかで搾取される女性労働者のエスノグラフィーと、北京の急速な都市化によって土地、住居、店舗などを奪われた都市住民に関するエスノグラフィー研究を行った。その結果前者の下層のパブリックにたいしては法的権利を学習する場を提供するなどの「強い介入」が、後者の上層のパブリックにたいしては彼らが抱える問題の分析を支援し助言を与えるなどの「弱い介入」が必要であると主張する (Yuan 2008)。

・インド

ブラウォイは市場化の波を19世紀から20世紀末にかけて労働の商品化、貨幣の商品化、自然の商品化と三つの段階に分けたが、しかしバヴィスカによれば、インド社会にはこれら三つの波が20世紀末から今日にかけて同時に押し寄せている。1990年以来多国籍企業と国家が一体となった開発優先政策を推し進め、その下で工業用地開発のために多くの農民が土地を奪われ困窮状態に陥っている。バヴィスカは2006年にインド東部オリッサ州カリンガナガールで起きた農民蜂起と警察による弾圧を事例にその実態を分析した結果、これらの民衆運動が政治的力を得るためには、国内のおよび国際的な脈絡への運動の広がりが必要なのではなくて——もちろん当該の問題を生み出す原因

と構造としてその脈絡を無視してはならないが——、問題が発生している地域の住民自体が運動の正面に座る土着的な性格が必要であること、またその民衆運動は国際的な行動よりは国家の行動と介入を求めている点を指摘し、グローバルな次元を重視するブラウォイの市場化の第三の波と市民社会の対応に関する図式との相違を浮き彫りにしている (Baviskar 2008)。

・ロシア

ロシアにおける社会学は、ペレストロイカ期においては国家政策を最大限有効に運用するための手段として活用され、ソヴィエト連邦崩壊後の市場経済化のなかでは市場調査や世論調査の手段として利用されてきた。すなわち、ここでは社会学は肥大化したポリシー社会学として存在してきた。他方では大学における社会学教育の歴史は浅く、社会学者に与えられる条件や地位も貧弱である。このような社会学のロシア的な文脈のなかで若い社会学者たちはパブリックへの関与ではなく、社会学それ自体の理論や概念を追求するプロフェッショナル社会学を志向している (Zdravomyslova 2008)。

このように見てくると、北米と西ヨーロッパの先進諸国以外では、ポリシー社会学が肥大化したロシアの特殊事情を例外として、パブリック社会学の主張と同調する方向性がそれぞれの国の社会学界に息づいていることがわかる。そしてブラウォイは、南アフリカやブラジルの社会学界に根付いたパブリック社会学をアメリカ社会学界に持ち込むことによって、アカデミズムの世界に自閉するプロフェッショナル社会学が影響力をもつアメリカ社会学の革新を企図したともいえる。

6 その他の論点

以下ではパブリック社会学をめぐるその他の論点を簡潔に整理する。

・メディアと社会学との関係

ヴォーン、ショア、エリクソンらはメディアによって社会学の知見が活用されるときに生ずる歪曲、矮小化、偏向の危険を指摘する (Vaughn 2004, Schor 2004, Ericson 2005)。社会の様々な分野における「社会学の利用」に関する調査を行ったベックによれば、社会学者の研究成果がジ

ャーナリストらによって利用されるとき、再解釈され、彼らの目的に即して変容される。したがって彼は、「社会学の知識の利用は、社会学の知識が使われていることと何の関係もない」という逆説が成り立つと指摘する (Beck 2005: 336)。

・大学間のヒエラルヒー

ブラウォイは、アメリカでは研究大学より州立大学においてパブリック社会学が広く実践されているが、しかし教員は教育に多大な時間を割かれ研究成果を出版する余裕がないので知名度は低いと述べる (Burawoy 2004b: 13)。これに対してタブリッチは、パブリック社会学の展開はその意に反して社会学内部の学術的ヒエラルヒーを強化する恐れがあると指摘する。すなわち、プロフェッショナル社会学とパブリック社会学との分業が、研究とその成果の出版に従事するエリートの研究大学の社会学者と、もっぱら教育に貢献する州立大学やカレッジの社会学者との分化を拡大する危険である (Tabrizi 2005: 366)。

・フェミニズムとの関係

フェミニズム研究の立場からアッカーは、パブリック社会学の主張にはフェミニズムの研究成果とその意味が充分にくみ取られておらず、その展開にはフェミニズムとの協働が不可欠であると指摘する (Acker 2005)。さらにブルワーは、パブリック社会学には「誰の知識」なのかという自問が欠落していると批判し、例えば、パブリック社会学はアメリカ黒人女性貧困層の「三重苦」というポジショナリティをどのように認識するのかと問いかけ、パブリック社会学自体のポジショナリティを問題視する (Brewer 2005)。

・アメリカ社会学中心主義

現代の世界の社会学においてアメリカ社会学が及ぼす大きな影響は否めない。この点についてタブリッチとホールはアメリカ社会学中心主義を批判しそれを相対化すべきであると主張し、さらにアリーとベックはグローバル化する市民社会に呼応して社会学自体が国民国家を超えるグローバルな学問に発展する必要があると主張する (Tabrizi 2005, Hall 2005, Urry 2005, Beck 2005)。私見を述べれば、ブラウォイは批判者たちと同じ方向性を追求している。パブリックへの接近を主張するパブリック社会学とそれを支える社会学的分業の

4 類型図式は、確かにアメリカ社会学の文脈を前提に構想されている。しかし既述のように、ブラウォイは USA 以外の国の社会学の経験も踏まえてパブリック社会学を提唱することによって、今日のアメリカ社会学のあり方に問題を提起した。したがって彼がアメリカ社会学中心主義から距離を置いていることは明らかである¹⁴⁾。またブラウォイは、それぞれの国の社会学者の間に横たわる研究面と経済面の条件における巨大な格差と、先進国——とくに合衆国とイギリス——の社会学の覇権を認めた上で、「下からのグローバル社会学」を提唱する。「すべての次元で支配に対抗するには、周辺からの声を中心の議論に参入することを認めて、局地的 local な社会学、それぞれの国 national と地域 regional の社会学の価値を高める必要がある。」(Burawoy 2008b: 443)¹⁵⁾

7 小括

本稿ではサバルタンとしてのパブリックに近接し双方向的かつ反省的な関係をととして研究を遂行することをめざすパブリック社会学の骨子を析出し、それにかかわる国際的な論争を検討すると同時に、パブリック社会学の主張は学問的性格を欠いた党派的イデオロギーであるとする批判に対して私見を述べた。ブラウォイのパブリック社会学の提唱は、既にみたように先進国から途上国、北側諸国から南側諸国まで、世界の各地域の社会学界において精力的に議論が交わされ国際論争が展開されている。しかし日本の社会学界においては、ブラウォイの提唱の簡単な紹介を除き、パブリック社会学の内容に立ち入って検討した研究は管見の限りでは一部にとどまる。本稿で整理した論点に限っても、理論のみならず社会運動、地域、労働、フェミニズム、知識人論などさまざまな研究領域から日本の社会学がこの国際的議論に寄与できると考える。本稿がこのような議論の広がりの一助になれば望外の喜びである¹⁶⁾。

[注]

1) M. ブラウォイの労働社会学者としての研究史とパブリック社会学の提唱へ至る経緯については、京谷 2009を参照されたい。なおブラウォイのパブリック・ソシオロジーは公共性や公共圏を主題とするもの

ではない。それは、社会学者がパブリックへ接近し、パブリックとの双方向的な関係において研究を進めることをととして、パブリックの自らの状況に対する「自己決定力」を高め、よって国家と市場による市民社会の抑圧状況を改善することをめざすものである。同時にパブリックは、その抑圧状況を甘受するのではなく、「自己決定力」をもってその状況を改善する能動的主体として設定される。したがって取えて日本語に置き換えれば「公衆社会学」が適切であろう。長谷川も「市民社会の主人公である actor としての public (公衆)」というブラウォイの主張の含意を指摘している(長谷川 2007: 535)。本稿では原語を生かしてパブリック社会学というカタカナ表記を使用する。

- 2) ガンズは1980年代の終わりにアメリカ社会学会会長として社会学とパブリックとの関係を改善する必要を主張した(Gans 1989)。ガンズは、社会学の研究に十分な価値があるという前提に立ち、その価値が社会によって評価されていないことを問題視し、社会学の成果をよりよく社会に伝達するための改善を課題とした——いわば社会学の publicity。これに対してブラウォイは、社会学研究の価値が衰退しているという前提に立ち、社会学の価値をパブリックへ接近し双方向的な関係を築くことによって復興するという課題を追求する。
- 3) ブラウォイは、ボラニーの「擬制商品 fictitious commodity」の概念(ボラニー1975)を援用して、市場化の波を以下の三つの段階に区分する。第一の市場化の波は労働の商品化によって特徴づけられ、その波は19世紀中葉に頂点を迎えた。第一の波に対して市民社会では、「労働組合、市民団体、あるいはコミューンや協同組合などの実験」をととして「労働が地域レベルで反応」した(Burawoy 2008d=2009: 101)。第二の市場化の波は貨幣の商品化によって特徴づけられ、その波は第一次大戦後に起き1930年代に頂点を迎えた。第二の波に対しては国家が「経済に対する国家による介入・規制および経済のブロック化」をととして反応し、そして「社会の反応は、ファシズム(ママ)、社会民主主義、ニューディール、スターリン主義などさまざまな形態」をとった(同上: 100)。第三の市場化の波は1970年代における資本主義の危機とともに始まり、植民地主義の解体、社会民主主義国家の衰退を伴い、共産主義の崩壊によって加速された。その波を特徴づけるのは、「自然の商品化(土地、環境そして身体)」である(Burawoy 2008a: 356)。第三の波に対する市民社会の対抗

運動はグローバルレベルで起きる (Burawoy 2008d=2009: 101)。市場化の波に関する考察については Burawoy 2008a, 2009c および日本労働社会学会年報第20号「小特集 市場万能の時代における労働研究の可能性——マイケル・ブラウォイとの対話」を参照されたい。

- 4) したがってブラウォイが想定するパブリック社会学の主要な対象は現実的には、サバルタンとしてのパブリックである。なおグラムシのサバルタン概念については松田 2007を参照されたい。
- 5) ブラウォイは伝統的パブリック社会学者と有機的パブリック社会学者を区分する。前者は出版物やマスコミなどのメディアを通してパブリックに語りかけ、『孤独な群衆』のD. リースマン、『心の習慣』のR. ベラーなどが例である。後者は労働運動組織、コミュニティ組織、人権組織などとともに働き対話的な関係をとおして研究を行う社会学者である。ブラウォイのパブリック社会学の特徴からすると後者に力点が置かれるが、しかし彼は両者の関係は排他的ではなく相補的であると考える (Burawoy 2005a: 7-8, 2005b: 426-431)。
- 6) このエスノグラフィーは具体的には、ザンビアにおける鉱山労働の調査 (Burawoy 1972)、シカゴの農業機械メーカーにおける職場の参与観察 (Burawoy 1979)、資本主義と社会主義の労働過程を比較するためのハンガリーにおける鉄鋼所などでの参与観察 (Burawoy and Lukacs 1992)、ペレストロイカ期ロシアのゴム製造企業、そしてソヴィエト崩壊後のコミ共和国の家具工場における参与観察である。そして40年余にわたるエスノグラフィー研究を振り返りブラウォイは、分析がグローバルな次元にまで広げられず国家の枠組みにとどまっていたこと、国家のあり方を固定的にとらえ新自由主義的な変化を見過ごしたこと、分析の焦点が労働が行われる生産過程 (職場) に絞られ生活の場である再生産過程 (家族・地域) にまで及ばなかったこと等々を反省している (Burawoy 2008d=2009, 2009a, 京谷 2009)。最後の反省は、市場経済化が急速に進む中で人々の生活が「大混乱」に陥る現実と直面したコミ共和国の調査をとおして生まれたものであるが、これがブラウォイが理論の焦点をマルクスの搾取の概念からポラニーの商品化の概念に移す契機となっている。
- 7) Abbott 2007とJeffries 2009bはパブリック社会学を社会学のディシプリンの転換であると規定している。パブリック社会学のディシプリンそのものを議論した論文は少ないが、パブリックとの密接な関係

という本質からして、そのディシプリンにおいては社会学の教育・研究と現実との距離を可能な限り近づける努力が追求される。学部の社会学教育についてパーセルは、現実の特徴や動向を示すデータを活用したり、時には学生自身に調査を行わせることによって、あたかも所与の自然のように見える社会的構成を反省させる重要性を指摘する (Persell 2009)。またボネイチはコミュニティにおける人種の不平等に調査をとおして学生、院生を関与させる社会学の教育実践について述べる (Bonaich 2009)。ブラウォイ自身の大学院教育におけるディシプリンについてみると、彼は大学院生の指導に当たってまずフィールドをもたせ、理論と現実との間の往復・対話によって研究を進めるように指導する。ブラウォイは1976年にカリフォルニア大学バークレー校に赴任して以降、大学院の参与観察ゼミナールの指導を担当している。この成果がMichael Burawoy and others 1991であり、また彼がドクター論文を指導する院生たちと協働した成果が同上2000である。両著には、AIDS患者支援組織、平和運動団体、移民の支援団体、州福祉労働者の労働組合、サンフランシスコのホームレス、同造船労働者、乳癌患者の運動などさまざまな対象に接近し理論との間を往復する院生の研究が収録されている。

- 8) 2009年5月27日に京谷が報告した学内研究会 (「マイケル・ブラウォイの軌跡——労働社会学からパブリック・ソシオロジーへ」) において野原光氏より、ブラウォイの主張する「関与 engagement or commitment」とは何かという質問を受けた。ブラウォイ自身の発言によれば、「活動家としてパブリックに関与するのではない。社会学者としてのアイデンティティと自律性と社会的展望を保持することが重要である。社会学者が活動家として関与することもありうるが、それは私の主張したいことではない。パブリックと協働する対話が必要であるが、しかしわれわれはパブリックと媒介的な関係をとるべきである。危険なのは『パブリックの虜』になることである。」 (2008年8月18日カリフォルニア大学バークレー校のブラウォイの研究室における京谷の聞き取り) さらに社会学者がパブリックに関与する実践的な意味は何か。それはサバルタンとしてのパブリックの「自己決定力を拡大」することであるとブラウォイは考える (Burawoy 2005c: 323)。野原氏の問いに対する解答としては未だ抽象の域を出ないが、今後さらに究明すべき重要な問題提起として受け止めている。なお先の「虜」になる危険については、後述す

る南アフリカのパブリック社会学が陥った隘路を参照されたい。

- 9) すべての社会学は批判的であるというエリクソンの認識で、社会学内部における批判的潮流の存在、例えば、ミルズやゲールドナーによるパーソンズ批判を適切に位置づけられるのか疑問である。
- 10) トウレーヌの社会学的介入とは、社会学者が環境汚染、土地収奪、失業の増大などに対して異議申し立てを行う人々の集合行為に参加し、当該行為の全体的な文脈のなかへの位置づけ、敵対グループや支援グループの分析などを援助して行為主体の自己分析能力を高め、行為主体自身を分析主体へと成長させ、かくして行為者の能力を最大限に高めることによって個別の闘争をより広い文脈をもつ社会運動へと発展させることをめざすものである。トウレーヌ1983を参照されたい。
- 11) 盛山のこの批判の背景には、今日の社会学の学問的基盤の衰退の原因に対するブラウォイとは異なる認識がある。盛山はその衰退は、ブラウォイの主張のように、社会学がパブリックから離れ、アカデミズムの世界に自閉したことにより起きたのではなく、アカデミズムの世界内部において「客観的理論」に対する不信感が広がり、経験的事実の報告はあっても「その経験的な諸事実をたばねるべき『理論』が欠如している」ことに原因があると強調する(盛山 2006: 93)。また太郎丸は、盛山と共通する方向で数理社会学の価値を強調する立場から、アメリカ社会学界を前提とするブラウォイの主張を「伝統的公共社会学偏重であり、プロ社会学が軽視されている」と彼が考える日本社会学の文脈に置き換えて、「プロ社会学を強化することが日本の社会学には必要である」と主張する(太郎丸 2010: 56)。他方パブリック社会学の主張を積極的に評価する立場から、長谷川はグローバル化し多様化する現代社会において、パブリック社会学が社会諸科学の対話可能性を開く媒介となりうる可能性に期待する(長谷川 2007)。
- 12) ブラウォイは、経済学と比較して社会学は分権化された構造と多元的なディシプリンをもっており、「それは、多様なパブリックとの多様な対話を活性化するパブリック社会学の観点からは資産である」と評価している(Burawoy 2004a: 127)。またパブリックの関心事の多様性に応じて、パブリック社会学の研究プログラムは多様であると述べている(Burawoy 2009c: 325-327)。
- 13) ウェーバー研究者の安藤英治は、価値自由とは

「価値理念や価値判断をできるだけ鮮明にさせることによってそれを自覚的に自己統制することを意味する」と規定し(安藤 1965: 89)、重要なのは事実認識と価値判断を混同せずに峻別することであると論ずる(同上: 103)。

- 14) ブラウォイ自身、社会学の分業の4類型はアメリカ社会学の特殊性を概念化するものであると同時に他国(アフリカ、旧ソヴィエト、ヨーロッパ)の経験も踏まえて構成されたものであることを述懐している(Burawoy 2005b: 419)。
- 15) ブラウォイという社会学者自身が、イギリス、南アフリカ、ザンビア、USA、旧東欧圏、ロシアを遍歴したグローバルなキャリアによって形成されている。ブラウォイの研究者としての軌跡についてはBurawoy 1996, 2005e, 京谷 2009を参照されたい。
- 16) ブラウォイとパブリック社会学について昨年、一昨年と2回にわたり職場の学内研究会で報告し、同僚諸氏より貴重な指摘と批判をいただいた。また野口雅史氏(長野大学非常勤講師)とは日頃よりパブリック社会学について議論を交わし、研究を進める貴重な示唆と刺激をいただいている。ここに記して謝意を表す。なお本稿の内容を圧縮して『社会学評論』第62巻2号に「<研究動向>パブリック・ソシオロジー」として発表予定であることを断わっておく。

[文献]

- Abbott, Andrew, 2007, "For Humanist Sociology," Clawson, Dan, and others eds., *Public Sociology*, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press, 195-209.
- Acker, Joan, 2005, "Comments on Burawoy on Public Sociology," *Critical Sociology*, 31(3): 327-331.
- Actes: *De La Recherche en Sciences Sociales*, 176-177, Mars 2009.
- The American Sociologist*, 36(3), 2005.
- 安藤英治, 1965, 『マックス・ウェーバー研究』未来社。
- Aronowitz, Stanley, 2005, "Comments on Michael Burawoy's 'The Critical Turn to Public Sociology,'" *Critical Sociology*, 31(3): 333-338.
- Baiocchi, Gianpaolo, 2005, "Interrogating Connections: From Public Criticisms to Critical Publics in Burawoy's Public Sociology," *Critical Sociology*, 31(3): 339-351.
- Baviskar, Amita, 2008, "Pedagogy, Public Sociology and Politics in India," *Current Sociology*, 56(3): 425-433.

- Beck, Ulrich, 2005, "How Not to Become a Museum Piece," *The British Journal of Sociology*, 56(3) : 335-343.
- Blau, Judith and Keri E. Iyall Smith, eds., 2006, *Public Sociology Readers*, Lanham, Boulder, New York, Toronto, and Oxford : Rowman & Littlefield Publishers.
- Bonaich, Edna, 2009, "Working with the Labor Movement," Lawrence T. Nichols, ed., *Public Sociology: The Contemporary Debate*, 73-94.
- Brady, David, 2004, "Why Public Sociology May Fail," *Social Forces*, 82(4) : 1629-1638.
- Braga, Ruy, Sylvia Gemignani Garcia and Leonardo Mello e Silva, 2008, "Public Sociology and Social Engagement," *Current Sociology*, 56(3) : 415-424.
- Braithwaite, John, "For Public Social Science," *The British Journal of Sociology*, 56(3) : 345-353.
- Brewer, Rose M., "Response to Michael Burawoy's Commentary," *Critical Sociology*, 31(3) : 353-359.
- Burawoy, Michael, 1972, *The Colour of Class on the Copper Mines*, Manchester : Manchester University Press for Institute for Social Research, University of Zambia.
- , 1979, *Manufacturing Consent*, Chicago : The University of Chicago Press.
- , 1985, *The Politics of Production*, London and New York : Verso.
- , 1996, "From Capitalism to Capitalism via Socialism: The Odyssey of a Marxist Ethnographer, 1975-1995." *International Labor and Working-Class History*, No. 50 : 77-99.
- , 2004a, "Manifesto for Public Sociology," *Social Problems*, 51(1) : 124-129.
- , 2004b, "Public Sociologies : Contradictions, Dilemmas, and Possibilities," *Social Forces*, 82(4) : 1603-1618.
- , 2005a, "For Public Sociology," *American Sociological Review*, 70 : 4-28.
- , 2005b, "Response : Public Sociology : Populist Fad or Path to Renewal," *The British Journal of Sociology* 56(3) : 417-432.
- , 2005c, "The Critical Turn to Public Sociology," *Critical Sociology*. 31(3) : 313-326.
- , 2005d, "Rejoinder : Toward a Critical Public Sociology," *Critical Sociology*. 31(3) : 378-390.
- , 2005e. "Antinomian Marxist." Alan Sica and Stephen Turner eds. *The Disobedient Generation*, Chicago : The University of Chicago Press.
- , 2008a, "What is to be Done? Theses on the Degradation of Social Existence in a Globalized World," *Current Sociology*, 56(3) : 351-359.
- , 2008b, "Rejoinder : For a Subaltern Global Sociology?" *Current Sociology*, 56(3) : 435-444.
- , 2008c, "Public Sociology in the Age of Obama." Address to the 81st Annual Meeting of Japanese Sociological Society. (Published in *The European Journal of Social Science Research* 22(2), 2009)
- , 2008d, "The Ethnographer's Curse : Labor Studies in the Era of Market Fundamentalism," 「マイケル・ブラウウォイ教授特別セミナー 市場万能の時代における労働研究の可能性」2008年11月24日, 於明治大学。(=2009, 鈴木玲記「エスノグラファーの呪——市場原理主義の時代の労働研究——」『日本労働社会学会年報』20 : 85-98.)
- , 2009a, *The Extended Case Method*, Berkeley, Los Angeles, London : University of California Press.
- , 2009b, "The Public Sociology Wars," Vincent Jafferis ed., *Handbook of Public Sociology*, 449-473.
- , 2009c, "Third-Wave Sociology and the End of Pure Science," Lawrence T. Nichols, ed., *Public Sociology : The Contemporary Debate*, 317-335.
- Burawoy, Michael and others, 1991, *Ethnography Unbound*, Berkeley and Los Angeles : University of California Press.
- Burawoy, Michael and Janos Lukacs, 1992, *The Radiant Past*, Chicago and London : University of Chicago Press.
- Burawoy, Michael and others, 2000, *Global Ethnography*, Berkeley, Los Angeles, London : University of California Press.
- Clawson, Dan and others eds., 2007, *Public Sociology*, Berkeley, Los Angeles, London : University of California Press.
- 土場学, 2006, 「公共性と共同性のあいだ——公共性の社会学の可能性——」『応用社会学研究』48 : 127-138
- , 2008, 「公共性の社会学／社会学の公共性——ブラウウォイの『公共社会学』の構想めぐって」『法社会学』68 : 51-64
- Derber, Charles, 2004, "Public Sociology as a Vocation," *Social Problems*, 51(1) : 119-121.
- Ericson, Richard, 2005, "Publicizing Sociology," *The British Journal of Sociology*, 56(3) : 365-372.
- Etzioni, Amitai, 2005, "Bookmarks for Public Sociologists," *The British Journal of Sociology*, 56(3) : 373-

- 378.
- Feagin, Joe, Sean Elias and Jennifer Mueller, 2009, "Social Justice and Critical Public Sociology," Vincent Jefferies ed. *Handbook of Public Sociology*, 71-88.
- Fishman, Walda Katz and Jerome Scott, "Comments on Burawoy: A View from the Bottom Up," *Critical Sociology*, 31(3) : 371-374.
- Habib, Adam, 2008, "Speaking 'Truth' to All Forms of Power," *Current Sociology*, 56(3) : 389-398.
- Hall, John A., "A Guarded Welcome," *The British Journal of Sociology*, 56(3) : 379-381.
- 長谷川公一, 2007, 「社会運動と社会構想」, 長谷川公一他編『社会学』有斐閣, 510-542.
- Gans, Herbert J., 1989, "Sociology in America: The Discipline and the Public," *American Sociological Review*, 54 : 1-16.
- International Sociological Association. *Current Sociology*. Vol. 56, No.3 May 2008.
- Jacobson, Michael Hviid, ed., 2008, *Public Sociology*, Aalborg, Denmark : Aalborg University Press.
- Jefferies, Vincent ed., 2009a, *Hand Book of Public Sociology*, Lanham, Boulder, New York, Toronto, Plymouth, UK : Rowman & Littlefield Publishers.
- , 2009b, "Redefining the Nature and Future of Sociology: Toward a Holistic Sociology," Jefferies, Vincent ed., *Hand Book of Public Sociology*, Lanham, Boulder, New York, Toronto, Plymouth, UK : Rowman & Littlefield Publishers, 1-23.
- 京谷栄二, 2009, 「解題 労働社会学者マイケル・ブラウオイの軌跡」『日本労働社会学会年報』20 : 109-121.
- Martinelli, Alberto, 2008, "Sociology in Political Practice and Public Discourse," *Current Sociology*. 56(3) : 361-370.
- 松田博, 2007, 「グラムシ思想の探究」新泉社.
- Nichols, Lawrence T. ed., 2009, *Public Sociology: The Contemporary Debate*, New Brunswick and London : Transaction Publishers.
- Nielsen, Francois, 2004, "The Vacant 'We': Remarks of Public Sociology," *Social Forces*, 82(4) : 1619-1627.
- 日本労働社会学会, 2009, 「小特集 市場万能の時代における労働研究の可能性——マイケル・ブラウオイとの対話」『日本労働社会学会年報』20 : 83-139.
- Persell, Caroline Hodges, 2009, "Teaching and Public Sociology," Vincent Jefferies ed., *Handbook of Public Sociology*, 205-221.
- ポラニー, カール, 1975 (吉沢英成他訳), 「大転換」東洋経済新報社.
- 盛山和夫, 2006, 「理論社会学としての公共社会学の構築に向けて」『社会学評論』57(1) : 92-108.
- Schor, Juliet, 2004, "From Obscurity to People Magazine," *Social Problems* 51(1) : 121-124.
- Smith, Dennis, 2008, "Globalization, Degradation, and the Dynamics of Humiliation," *Current Sociology*. 56(3) : 371-379.
- Tabrizi, Behrooz Chamari, 2005, "Can Burawoy Make Everybody Happy? Comments on Public Sociology," *Critical Sociology*, 31(3) : 361-369.
- 瀧川裕貴, 2007, 「公共社会学論争の検討——社会学的規範理論の構築に向けて——」『ソシオロギス』31 : 20-38.
- 太郎丸博, 2010, 「数理社会学・リベラル・公共社会学」『フォーラム現代社会学』9 : 52-59.
- Title, Charles R., 2004, "The Arrogance of Public Sociology," *Social Forces*, 82(4) : 1639-1643.
- トゥレーヌ, アラン, 1983 (梶田孝道訳), 「声とまなざし」新泉社.
- Vaughan, Dianne, 2004, "Public Sociologists by Accident," *Social Problems* 51(1) : 115-118.
- Wieviorka, Michel, 2008, "Some Considerations after Reading Michael Burawoy's Article: 'What is to be Done? Theses on the Degradation of Social Existence in a Globalizing World'," *Current Sociology*, 56(3) : 381-8.
- Yuan, Shen, 2008, "Strong and Weak Intervention," *Current Sociology*, 56(3) : 399-404.
- Zdravomyslova, Elena, 2008, "Make Way for Professional Sociology!," *Current Sociology*, 56(3) : 405-411.